2025_1222「冬枯れに残る赤い実 ― カラスウリの生存戦略」日々の理科 4152 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

今の時期、冬枯れの景色の中に、カラスウリの赤い実がたくさん残っているのをよく見かけます。近づいて観察しても、鳥や獣に食べられた様子はほとんど見かけません。これは一体どういうわけでしょう？

カラスウリの果実は、見た目こそ鮮やかな赤色で目立ちますが、甘味や香りが弱く、渋味や苦味を含んでいます。そのため、秋から初冬にかけて果実が豊富な時期には、ヒヨドリなどの果実食の鳥にとっては魅力に乏しく、積極的に食べられることがありません。さらに栄養価も高くなく、冬を越すために効率よくエネルギーを得たい動物にとっては、優先順位の低い食べ物なのです。その結果、他の木の実が次々と食べ尽くされる中でも、カラスウリの果実だけが蔓にぶら下がったまま、冬枯れの景色の中に取り残されてしまうわけです。

しかし、これは決して「食べられない果実」という「カラスウリの失敗」ではありません。冬が深まり、ほかに食べるものがほとんどなくなる厳寒期から早春にかけて、鳥たちは選り好みができなくなり、ようやくカラスウリの果実にも手を伸ばします。その際、果肉だけが消化され、硬く丈夫な種子は壊れずに糞とともに運ばれ、親株から離れた場所へと散布されます。つまりカラスウリは、あえて「最後まで残る果実」になることで、競争の少ない時期に確実に種子を運んでもらう戦略をとっているのです。冬枯れの中で赤く残る実は、静かに春への準備を進めている証とも言えるでしょう。

（2025 年 12 月中旬／神奈川県小田原市入生田）